

国立東京療養所 寿康館にて

放蕩息子

――ルカ伝第15章11～32節――

1956年7月29日

小池辰雄

序説 離神 流転 帰神 天的歓喜 己が義 絶信の信 無条件の愛

【ルカ15・11～32】

11 また言いたもう『或人^{あるひと}に二人の息子あり、¹²おとうと父に言う「父よ、財産のうち我が受くべき分を我にあたえよ」父その身代^{しんだい}を一人に分けあたう。¹³幾日も経ぬに、弟おのが物をことごとく集めて、遠国にゆき、其処にて放蕩にその財産を散らせり。¹⁴ことごとく費したる後、その国に大なる飢饉おこり、自ら乏しくなり始めたれば、¹⁵往きて其の地の或人に依附^{よりすが}りしに、其の人かれを畑に遣^{つか}わして豚を飼わしむ。¹⁶かれ豚の食らう蝗豆^{いなしまめ}にて、己が腹を充^みたさんと思う程なれど何をも与うる人なかりき。¹⁷此のとき我に反りて言う「わが父の許^{もと}には食物あまれる雇人^{やといびと}いくばくぞや、然るに我は飢えてこの処に死なんとす。¹⁸起^たちて我が父にゆき「父よ、われは天に對し、また汝の前に罪を犯したり。¹⁹今より汝の子と称えらるるに相應しからず、雇人の一人のごとく為し給え」と言わん」²⁰乃ち起ちて其の父のもとに往く。なお遠く隔たりたるに、父これを見て憫^{あわれ}み、走りゆき、其の頸^{くび}を抱きて接吻^{くちつけ}せり。²¹子、父にいう「父よ、我は天に對し又なんじの前に罪を犯したり。今より汝の子と称えらるるに相應しからず」²²然れど父、僕どもに言う「とくとく最上の衣を持ち来りて之に著^きせ、その手に指輪をはめ、其の足に鞋^{くつ}をはかせよ。²³また肥えたる犢^{こうし}を牽ききたりて屠^{ほふ}れ、我ら食して楽しまん。²⁴この我が子、死にてまた生き、失せて復得^{また}られたり」斯^{かく}て、かれら樂しみ始む。²⁵然るに其の兄、畑にありしが、歸りて家に近づきたるとき、音楽^{なりもの}と舞踏^{おどり}との音を聞き、²⁶僕の一人を呼びてその何事なるかを問う。²⁷答えて言う「なんじの兄弟、歸りたり、その恙^{つつが}なきを迎えたれば、汝の父、肥えたる犢^{こうし}を屠^{ほふ}れるなり」²⁸兄、怒りて内に入ることを好まざりしかば、父いでて勸^{すす}めしに、²⁹答えて父に言う「視よ、我は幾歳^{いくとせ}も、なんじに仕えて、未だ汝の命令^{そむ}に背きし事なきに、我には小山^{やぎ}羊一匹だに与えて友と樂しましめし事なし。³⁰然るに遊女^{あそびめ}らと共に、汝の身代^{くら}を食い尽くしたる此の汝の子、歸り来^{きた}れば、之がために肥えた



る贖^{しうし}を屠^{ほふ}れり」³¹父いう「子よ、なんじは常に我とともに在り、わが物は皆なんじの物なり。³²然れど此の汝の兄弟は死にて復^{また}生き、失せて復得られたれば、我らの楽しみ喜ぶは当然なり」』

●序説

15章の初めに、

「取^{しゆぜい}税人・罪人等、みな御言^{みことば}を聴かんとして近寄りたれば」(ルカ15・1)

とあります。この取税人とは当時、爪はじきにされていた人たちであり、また、罪人とは律法のことに詳しくない人たち「アムハアレツ」(地の人)といわれる俗人たちです。

「パリサイ人・学者ら^{つふや}呾^{つみびと}きて言う、『この人は罪人を迎えて食を共にす』」(ルカ15・3)

パリサイ人とは、モーセ律法を拳々服膺^{けんけんふくよう}していると、自認している連中です。また学者とは、このユダヤ律法に通じている連中で、教法師ともいわれる人たちのことです。取税人・罪びとに対立するところの、いわゆる宗教的・道徳的にまた知的にも、特権階級であった人たちです。それで、彼らのこの呾^{つみびと}きが、実に、彼ら自身の知らない真理を語っています。実に、イエスの本質を現わしているのです。この三つの譬^{たと}え話にそれが明らかに示されています。その第一は「一匹の迷える小羊」という有名な話、第二は「失われたる銀貨」の話、第三は「放蕩息子の話」です。

今日はその第三番目の放蕩息子の譬えを中心にして、お話をしたいと思います。

●離神

11また言いたもう『或人^{あるひと}に二人の息子あり、¹²おとうと父に言う「父よ、財産のうち我が受くべき分を我にあたえよ」父その身代^{しんだい}を二人に分けあたう。

¹³幾日も経ぬに、弟おのが物をことごとく集めて、遠国にゆき、其処にて放蕩にその財産を散らせり。

財産は、当時の習わしに従い、兄が二ならば、弟は一という割合に分けたのでしよう。

¹³幾日も経ぬに、弟おのが物をことごとく集めて、遠国にゆき、

と、このことが何を語っているかというと、

「父のもとを離れた」

ということが、私たちについて考えれば、

「神さまのもとを離れる」

ということ です。

「神のもとを離れて独立する」

と、人間はいいます。独立・自由・民主と言う。現今^{いま}の日本人は、民主主義的な文化人だ



と思っていますが、この神主しんしゅでなく民主、つまり

「人の上に人なく、人の下に人なし」

というけれども、

「人の上に神あり」

ということを知らない。ここに日本の文化の根本的喪失があります。

この弟は父のもとを空間的・地理的に離れましたが、もつと更に根本的には、

「お父さんの心から離れた」

ということ、父と子との間の「子の繋がりつな」が切れたということです。これは重大なことです。モーセの十誡にも、

「汝の父と母を敬え」(出エジプト20・12)

とある通り、私たちの人間の父子は信頼と愛との関係にあるはずですが、ところが、近頃の若い世代は、どういうことであるかと思うとき、実に寒心に堪えないものがある。また、社会というものが、文化というものが福音から離れ、神を父として崇めるあがこの福音から離れています。この弟が遠国に行ったということの重大な意味はここにあると思う。20世紀の文明はこの「遠国に行った」文明であり、神のもとを離れた文明である。

「遠国にゆき、其処ほうしやうにて放蕩ほうとうにその財産を散らせり」

大いに独立してやろうと思ったわけですが、結局、父のもとを離れ、神のもとを離れるということは、サタンの配下ですから、当然の結果として放蕩ということが起きてきたわけです。

● 流転

14 ことごとく費したる後、その国に大なる飢饉うけおこり、自ら乏しくなり始め
たれば、15 往きて其の地の或人よりすがに依附よりしに、其の人かれを畑つかに遣わして豚
を飼わしむ。

この息子は、内的な乱れと自然現象の飢饉うけにより、内外ともに悲惨なことになってきました。仕方がないから、ある人に、即ち人間に依りすがった。人に依り頼んでも救いはこない。彼は未だ父のもとに帰るというところところにこない。

「其の人かれを畑に遣わして豚を飼わしむ」

豚は、レビ記にもある通り、汚らしい動物の一つであるとされています。

「7 猪ぶた是は蹄ひづめあい分かれ蹄ひづめまったく分かるれども反芻にれかむことをせざれば汝等には汚れたる者なり。8 汝等は是等の者の肉を食うべからず、またその死体しかばねにさわるべからず、是等は汝等には汚れたる者なり。」(レビ記11・7～8)

ユダヤ人は豚を汚れたる動物だと思っている。イエスさまは、

「神の造り給うたものに汚れたものはない」



と言われた。使徒行伝(10・9～16)にもペテロが、その伝統的なユダヤ人の考え方にとらわれて、「食物の潔き物と潔からざる物」とで迷い、それについての示しを受けました。いずれにしても、汚れていると思われる豚を飼わされたのです。

● 帰神

16 かれ豚の食らう蝗豆^{いなごめ}にて、己が腹を充たさんと思ふ程なれど何を与うる人なかりき。17 此のとき我に反りて言う「わが父の許には食物あまれる雇人^{やといびと}いくばくぞや、然るに我は飢えてこの処に死なんとす。18 起ちて我が父にゆき『父よ、われは天に對し、また汝の前に罪を犯したり。19 今より汝の子と称えらるるに相応^{ふさわ}しからず、雇人の一人のごとく為し給え』と言わん」

この息子もやつと目が覚め、本来の我に還ったわけです。そして、

「自分はお父さんの子ではない。雇人の一人のようにしてください」

と、かく言わんと決意した。この弟が心の中にこの告白を戴くようになったという。このことは、誠に麗しいことであり、砕かれた心になったのです。

現今の20世紀の文化もこの放蕩息子の碎けにこななければ、本当に祝福されたものにはならない。私たちはこの放蕩文化の子ですが、この文化に甘んじてはいけけない。この文化を根底から荷^{にな}つて、本当の文化に変質変貌させるところの福音を新しくとり植えつけなければならぬ。私たちは、このような使命を荷わされている。ですから、ここを読むとき、自ら放蕩息子の文明の一員となつて、父のもとに帰るということを、自ら深く身に体さねばならないと思う。どんなに素晴らしい人間の造り出したものでも、

「神から出で、神に帰る」(コリント前8・6)

のでなければ、放蕩哲学であり、放蕩芸術であり、放蕩事業でしかないのです。

● 天的歓喜

20 乃ち起ちて其の父のもとに往く。なお遠く隔たりたるに、父これを見て憫^{あわれ}み、走りゆき、其の頸を抱きて接吻^{くちづけ}せり。21 子、父にいう「父よ、我は天に對し又なんじの前に罪を犯したり。今より汝の子と称えらるるに相応しからず」22 然れど父、僕どもに言う「とくとく最上の衣を持ち来りて之に著せ、その手に指輪をはめ、其の足に鞋をはかせよ。23 また肥えたる犢^{こうし}を牽ききてりて屠れ、我ら食して楽しまん。24 この我が子、死にてまた生き、失せて復得^{また}られたり」斯て、かれら楽しみ始む。

「乃ち起ちて其の父のもとに往く」

と。これも彼は単なる瞑想ではない。これは行為的です。全身をもって父のもとに帰りゆくことである。



「なお遠く隔たりたるに」

父はこの帰り往く子供をすでによく知っていたのであろう。何時帰ってくるか目を遙かに上げて、子の姿が見えないかと、一日千秋の思いで待つていた。

「父これを見て憫み」

この「憫み」という言葉が一番初めに出ている。これは父にとっては、たまらなかったのです。それで可哀想に思つて、子供より早く走りゆき、

「其の頸を抱きて接吻せり」

これは最大の愛情の現われです。言葉より先に愛の行為です。父は子に対して何も言わな

いが、これが父の言葉ならざる言葉です。

「父よ、我は天に対し又なんじの前に罪を犯したり。今より汝の子と称えらるるに相応しからず」

と、そう言つて彼は身を投げるようにして、父の前に平伏しました。しかし、これに対する父の答えは、

「とくとく最上の衣を持ち来りて之に著せ、その手に指輪をはめ、其の足に鞋をはかせよ」

と。これみんな子としての取り扱いであり、下僕としてではない。

「また肥えたる犢を牽きたりて屠れ、我ら食して楽しまん」

ここでもまた食事のことが出ている。イエスの宗教は、考える宗教ではなく、「喰う」宗教であるからです。

「この我が子、死にてまた生き、失せて復得られたり」

「このわが子」という、ギリシア語でもそうです、非常に力強い表現です。父にとっては、死んだ子がまた得られたということは天の喜びです。

エレミヤ記に、

「エホバよ、汝はわが神なれば、我をひきかえしたまえ、然らば我かえるべし」

(エレミヤ31・18)

とあります。私たちが帰るより先に、神さまの方が先に帰ってきてくださる。神さまが走り迎えることがなかったならば、どうにもしようがない。もし私たちが帰り行くだけだったら、帰りゆけないかも知れない。私たちの全身が、魂が神に向かつて「父よ」と叫ぶとき、それが何時、如何なるところであらうとも、神さまは大手を拡げて迎えてくれるのです。

第一、第二の譬え話にもあるように、そのとき天に大いなる喜びがあり、これは天的な歓喜です。

●己が義

25 然るに其の兄、畑にありしが、帰りて家に近づきたるとき、音楽と舞踏と



の音を聞き、²⁶僕の一人を呼びてその何事なるかを問う。²⁷答えて言う「なんじの兄弟、帰ったり、その恙^{つつが}なきを迎えたれば、汝の父、肥えたる犢^{こうし}を屠^{ほふ}れるなり」²⁸兄、怒りて内に入ることを好まざりしかば、父いでて勧めしに、²⁹答えて父に言う「視よ、我は幾歳^{いくとせ}も、なんじに仕えて、未だ汝の命令に背^{そむ}きし事なきに、我には小山羊^{やぎ}一匹だに与えて友と楽しましめし事なし。³⁰然るに遊女^{あそびめ}らと共に、汝の身代を食い尽くしたる此の汝の子、帰り来^{きた}れば、之がために肥えたる犢^{こうし}を屠^{ほふ}れり」

「兄、怒りて」とあります。どうして怒ったか。兄は立派な兄でした。お父さんのもとにて、よく仕えた人なのです。弟の方がでたらめなんです。道德の角度からいうと、確かに褒められていい。そこで、

「これはけしからん、お父さん、不公平だ!」

と、怒ったわけです。ところが「兄が怒った」ということは大変なこととして、ここにパリサイの精神が巢をくつていた。即ち、己を義としたのです。

「私はこんなにお父さんに仕えたではないですか」

と、自分の功績を、つまり、パウロのいう自分の律法の義を誇っていた。自分の実存を自ら義としていたということ、ここに大きな間違いがあつた。どんなに麗^{うるわ}しい立派なものでも、己を義とし、それを数えたてている限り、それが信仰の事態において最も戒むべきことである。ここから諸々の宗派争いが生ずる。

日蓮は素晴らしかった。私は日蓮の信仰を素晴らしいと思う。しかし、彼が他派を排撃したところから、即ち、己の信仰そのものを、ある角度から義としたところに間違いがあるのではないかと思う。

いつも申し上げている通り、「桔梗^{きぎよう}」は「撫子^{なでしこ}」に向かつて、

「お前は花ではない」

と言えない。また、「撫子」も「桔梗」に向かつて、「お前は花ではない」と言えない。「撫子」の麗しきは、互いに尊重し讃^{たた}えあつて、ともにこの自然の讃美の姿として、黙々として咲いているという、ここに自然界の素晴らしい調和があると思う。そのように、自然界の多種多様性は、植物界においては争いをしてはいないようですね。その点では、どうも動物界、人間界の方が罪を犯している。それが宗教界におきましても、かつては宗教戦争ということまでいきついてしまった。神さまは

「それは違う」

と申される。キリストが最も嫌われたのは、己を義とするパリサイの角度です。マタイ伝23章にあるように

「偽善なる学者・パリサイ人^{びと}よ」

と言つて、天的な怒りを発せられたのであります。



●絶信の信

この兄は己を義として、弟を貶し、弟をけなした心がその態度として現われた。

「自分には、一向、このようにして楽しませてくださったことがないではないですか」

と。もしこの兄がですよ、お父さんと本当に同心になっていたら、弟が帰って来たときにお父さんと同じように、

「ああ、よく帰って来たね、お父さんと一緒に心配していたよ」

と、こうするはずですよ。しかし、そうはこなかった。兄は「父と共にあった」が、なるほど空間的には一緒にいた。しかし、その心は父と共になかった。

ここに重大なことがある。兄は父と共にいながら、父と共になかった。弟は父を離れて、そしてこれも父から離れていた。父から離れているのに二つのあり方がある。叛いて離れてしまっているのと、一緒にいながら離れているとがある。一緒にいながら父の心を心としていない。福音の世界にありながら、キリストの福音を福音としていない、というならば、これパリサイ的宗教ではない。

もし、無教会が無教会を自ら義認し、教会が教会を自ら義認するならば、これはとんでもないパリサイになってしまう。それぞれ大いに特殊性をもってもよい。また、持つべきである。ところで、本当に深い底において連なっているという自覚、この普遍性・絶対性を持っているか？ここに問題がある。ですから、福音の事態を私してはいかん。どこまでも私たちは福音に捕まえられていきなさい。福音に捕まえられて、福音の中に投じていけば、福音自ら私たちをのっぴきならない存在に、特殊性にしていきながら、しかも、その性格が充分に現われてくる。私が常に申し上げますように、その信に絶した「絶信の信」というわけです。この

「兄が怒って」

というただ一語の中に、恐るべきパリサイ根性がかくされていた。

●無条件の愛

³¹父いう「子よ、なんじは常に我とともに在り、わが物は皆なんじの物なり。

³²然れど此の汝の兄弟は死にて復生^{また}き、失せて復得られたれば、我らの樂し

み喜ぶは当然なり』

「子よ、なんじは常に我とともに在り」

と。お父さんは、本当にこの兄と一緒にあるとし、お父さんのものはみな子のものであるとしていた。しかしながら、この兄はお父さんのこの心を受けとっていなかったわけです。もし、お父さんと喜びを共にする兄であったならば、このご馳走において喜びがさらに倍加され、祝福されたのでありましようが。



「されど、この汝の兄弟は死にて復^{また}生き、失せて復得られたれば、我らの樂しみ喜ぶは当然じゃないか」

この「当然」という言葉は非常に重い言葉です。

「樂しみ喜ばざるを得ないじゃないか」

というのです。

私たちはこの譬え話において、この兄の自己義認のパリサイの非と、また、弟が内的にも外的にも父のもとを離れたという根本的な罪と、しかしながらこの罪に目覚めて父のもとに帰りきたるという回心、この三つの事態の中に私たちの存在の一切が表現されていることを知るのであります。人類の歴史は、実にこの譬え話の中に、諸々の複雑な様相といえども、結局は含まれてしまう。

今のキリスト教の事態はどうでしょうか？ 父と共に在るような事態で、福音を語り、聖書を研究し、礼拝はもたれます。それはキリストと共に、神と共に、聖書と共にであるけれども、反つてその「共に」が本当に内側から受けとっている「共に」であるか。外側の「共に」であるなら、それはパリサイ的な共にであり、また、律法の義であつて、福音の義とはなっていない。即ち、キリストを本当に私たちが受けとっている、

「我、キリストの中に^{うち}。キリスト、わが内に」(ガラテヤ2・20)

という世界でない。これはどうして可能であるか？ それは、この放蕩息子が父のもとに帰りいくところの姿において可能なのです。実に、私たちにとっては、これは全身なのです。パウロが、

「栄光より栄光に到りて、遂にキリストの姿に化するなり」(コリント後3・18)

と言ひ、また、

「信仰より信仰に」(ロマ1・17)

と言ひ、ヨハネが、

「恩恵より恩恵へ」(ヨハネ1・16)

と。また、詩篇の中に

「力より出でて、力に行く」

という、これみんな、父のもとに帰りいくことと同じではないですか。即ち、私たちは徹底的にこれを神に歸し、また神のもとに歸り行く、ということによつて、神が限りなく与え、また、神が限りなく進ましめ給う。私たちが神のもとに歸り行くとは、具体的にはどのようなことであるか。いうまでもなく、

「我は道なり、真理なり、生命なり」(ヨハネ14・6)

という、このキリストのもとに歸り行くことです。

このキリストの譬え話の中には、父と私たちとの間を媒介してくださる、^{あがないぬし}贖主という存在が見えないようですが、実は、この父の中にそのキリストが隠れている。キリストがこ



の譬え話をおっしゃりながら、無条件にこの放蕩息子を容れている。イエス・キリストは私たちを無条件に容れ給う方ではないですか。

「もうすこし信仰が進み、修養が増し、実存がよくなってから来なさい」

とは、キリストはおっしゃいませんでした。この15章の始めの方に、

「この人は、罪びとを迎えて食を偕ともにす」(ルカ15・2)

とあります。もちろん、パリサイ人たちが言った罪びとより、もつと深い意味で、私はこの「罪びと」という意味を今とるのです。すなわち、キリストは私たち罪びとを迎えて食をともにする方で、無条件に迎えてくださる方です。この父が無条件に息子を迎えたように、キリストは私たちを無条件に迎えて、

「さあ、ご馳走を食べなさい」

と言つてくださるのです。キリストというご馳走(ヨハネ6・35)を食べるのです。それなのに、

「キリストのもとになかなか帰れない」

と申します。何故、そう言うのですか。私たちはこのキリストが既に十字架をもって私たちをすつかり、もう帰らしめていらつしやるのです。

「お前はすでに帰つたのだよ。だから、いよいよ、父のもとに入つていきなさい。」

限りなくこの福音の世界に進んでいきなさい」

と。これはキリストの十字架が既に、私たちをして帰らしめている。

「帰れよ、帰り得るよ」

というわけです。歴史を本当に荷い、進ましめて行くものは、この原始福音に帰って行くことです。そうしたならば、もう兄のこの「パリサイ」はすつかり砕かれます。私たちは、何故、キリストがこの放蕩息子の譬えを言われたか。人間がどんなに父のもとを叛そむいて離れて行くものであるか。また、人間がどんなに己を義するものであるか。この二つの深刻な、私たちの相すがたです。離れ行く相と、己を義とする相と、この二つに対する解答を、ちゃんとキリストはこういう譬え話をもって、

「聴く耳ある者は聴くべし」

と言われている。これは解説ではない。本当にその中に身を投じて、告白しなければならぬ。そうしたならば、このルカ伝15章は身につく。私たちが毎日、父のもとに帰ること、そのことが終末の世界を、神の新天地を迎えるゆえんです。まことの展開とはそこに在る。これで、皆さんといつしよにこのルカ伝15章を、お粗末ではありますが、身読しんどくしたと思う。しかしながら、これは限りなく常に新たに捉とらえるべき事態でして、この聖書は一回毎に私たちに新しき響きをもつて響いてまいります。どうか、いよいよここを深く自分のものにして戴きたいと思います。終わります。アーメン。

(『愛泉』誌第5号、1956年8月刊より転載)

